
ガーディアン・オブ・スクール

茶玖羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガーディアン・オブ・スクール

【Nコード】

N5608S

【作者名】

茶玖羅

【あらすじ】

魔法の存在する世界。その世界でごく普通？の魔法学校生来島隼人が転向した学校フロンティア。その学校の生徒会ガーディアン・オブ・スクールは、地域と学園の守護者だった。ある騒動をきっかけにガーディアン・オブ・スクールに入ることになった隼人の送る学園ファンアジー。

引越しの夜（前書き）

初めて小説を書きました。未熟な点が多々あると思いますが、最後まで読んでもらえたら光栄です。出来れば、感想等お願いします。

引っ越しの夜

魔法が存在する世界。

そんな世界では、魔人や魔獣といった、人に害為すモノがいる。彼らは自分の欲に従い動き、人を苦しめる。

そのような存在に対して魔法を駆使し、立ち向かう者たちがいる。人々を護る守護者。脅威から世界を護る守護者。弱きを助け、強き心で人々を導く「ガーディアン」である。

「終わったー。」

俺、来島隼人くるしまはやとは身長175cm、体重63?、血液型A型、誕生日が5月8日でおうし座という、ごく普通のステータスを持ったごくごく普通の魔法学校生である。

17年前両親によりこの世に生を与えられた。現在は、妹と親父と母さんと4人で暮らしている。たった今、引っ越して来たばかりの自分の部屋の整理が終わったところだ。2月末に親父に転勤の内示が出て、それに合わせて引っ越しの作業をしてきたのである。

この転勤がこの2ヶ月の間にウチをどんなに忙しくしたことが。とにもかかわらず、自分の部屋の整理が済んで一段落といったところである。

ふとドアの方を見ると、黒い綺麗な長髪をポニーテールにしている、少し幼顔の少女が出てきた。我が妹、来島空くるしまそらだ。

身長は155cmぐらい。本日はジーパンにセンターに赤い大きなハートがある黒Tシャツというファッションだ。

ちなみに、今回の引っ越しで一番大変だったのが空だった。

一応1月には引っ越しの話が持ち上がったものの、高校受験前の空にとっては志望校を直前になって変更することになるのである。しかも、空の志望する魔法学校はこの近辺には一流校と言われ、俺

の編入先ともなっていたフロンティア（正式名称はフロンティア魔法学校である。）しかないのだ。

魔法学校の受験は一般的な試験と魔法実技の2つがある。魔法実技は折り紙つきの空だが、勉強については平均点クラスだった。勉強の分野でも当然優秀なフロンティアは空にとっては高い壁だった。それでも、頑張り屋な空はその現実を受け止め、志望校変更の日から猛勉強を開始したのである。そして、見事に合格を決めたのだった。

ちなみに編入に関しては、魔法学校に在籍中の生徒はよほど素行が悪くない限り親の都合での転向などの止む得ない場合は、無条件で行われるシステムになっている。よって俺は、全く問題なくフロンティアへの転校が決まったのだ。

そんな頑張り屋の我が妹が部屋の様子を見まわした後、こういった。「お兄い、片づけ終わったんだね。それなら晩御飯の準備手伝ってよ。」

「少し休憩させてくれ。」

片づけを済ませてすぐという気だるさからそう答えた。

「ご飯がすんだら休憩すればいいでしょう。手伝いといっても食器並べるだけなんだから。ほら、はやく。」

「はあー。」

溜息がでてしまったが、空のいうことも至極当然のことなのであるからして。

「へーい。」と、2つ返事で了承することにした。

空の後ろについていきリビングに行くと言欲をそそる匂いがしてきた。不意に腹の虫になる。

「そういえば今日の昼はおにぎり1つだけだったもんな。道理で腹が減るわけだ。晩は豪華なのか？」

ご飯をよそっている空に期待を込めて聞いてみる。

「そんなに豪華な訳ないでしょう。ご飯に味噌汁、生姜焼きだけだよ。」

「生姜焼きかあ。まあ、肉を食べるのならいいか。」

空はよそぎ終わった茶碗を2つおいて、次は生姜焼きの盛りつけにかかり始めた。それを見て、俺はご飯を食台に持つていく。

「親父と母さんは？」

「買い物に行つて、そのあと二人でご飯食べて来るつて。」

「二人だけで夕食かよ。」

「ホントあの二人はいつまでたつてもイチャイチャしてるよね。」

本当に、ウチの両親にも困ったものである。休みがあれば2人でどこかにでかけたり、暇があればイチャついていたり、なにをするにもいつも一緒な気さえしてくる。とても、思春期の子を2人もった親には見えない。

「まあ、いつも仲睦まじくやっているんだから、家庭的にはいいことだよな。」

「もう少し恥じらいを持つてほしいけどね。年頃の娘もいるんだし。」

「

「確かにな。」

そんな他愛もない会話をしながら2人で食事の準備を続けた。

「ごちそうさまでした。」

食事を終えて食器を流し場においてくる。買ったばかりの新しい白いソファ―に座りゆっくりしていると、空が紅茶を淹れて持つてきた。

「おつかれ。」

「ありがとう。」

淹れてきた紅茶はとてもいい匂いがして、心が安らいだ。空は紅茶を淹れるのが趣味であり、その腕は店で出しても通用するぐらいだと思っっている。

「お兄いは明日から学校でしょ？」

対面側にあるソファに腰掛けた空が新たな話題を振ってきた。

「そうだな。転校初日になるし、早めに行くかな。」

「じゃあ朝ご飯は私が作るのかな。何時に起きる予定？」

「うーん。歩いて15分ぐらいの距離だからなあ。8時半に教室につけばいいから、7時に起きるくらいでいいかな。」

「わかった。じゃあそれに合わせて朝食の準備しておくね。」

「ありがとう。」

この兄にはもったないくらい良い妹をもったと改めて感心する。

「そういえば、詩織しおりさんもフロンティアに通ってるんだよね？」

空のいう詩織というのは、俺たちの幼馴染である。性は神崎かみざき名は詩織。俺は小学校低学年の頃この辺りに住んでいたことがあったのだ。その当時、毎日のように一緒に遊んでいたのである。とても明るく、誰にでも分け隔てのない優しさを持っていた。そしてなによりも魅力的だったのが、彼女の笑顔だった。

詩織の笑顔はどんなに怒っている人でも落ち着かせてしまうような優しさがあった。そんな彼女はクラスだけに限らず学校中の人気ものだった。

また、詩織の実家は剣道場を営んでいる。詩織も剣道をやっていて腕前も同学年の中でもピカイチだった。そんな幼馴染と今まで引越してから文通を交わすようになり、携帯電話を持つようになったからはメールを続けてきていたのである。

「ああ、今日メールがあったんだが同じクラスだったらいい。引越しのせいで始業式にも出られなかったから、1人でも知り合いがいるのは心強いよな。」

本当なら今日の朝にはこっちについて、学校に行った後片づけを始めるはずだったのだが、高速の渋滞によって予想よりもかなり遅れて昼にこちらに到着。

もちろん、始業式だけの今日はすでに学校は終わっているのですが、そのまま引越しの片づけに入る形になったのである。

転校生が初日から学校を休むのは色々話題になりそうなので嫌だったのだが、過ぎたことはしょうがない。

この話題を存分に使ってクラスに居場所を作りたいとポジティブに考えることにする。

「詩織さんと一緒に楽しくなりそうだなね。」

空がニヤニヤした顔つきで俺を見つめてくる。

「やけに楽しそうだな。多分お前が思っているような展開にはならないと思うぞ。」

「私が思っている展開ってなんなのかな？」

「夢見がち女の子が発想しそうな展開だ。」

「私は別にそんなことを考えていません。そんな言葉が出てくるお兄いのほうが期待してるんじゃないの？」

小悪魔な表情で見つめ続けてくる空に、俺は少し困惑しながらも、

「そういえば、お前と詩織ってまだ一度も会ったことなかったよな？」

と、話題をすり替えるようにした。だってそうだろ。俺だって男だ。可愛い幼馴染と再会することに期待しない男のほうがおかしいだろう。しかし、妹にそれを悟られるのはものすごく悔しいのだ。

ならば、戦略的撤退をとるのは、とても重要なことだろう。

「話をすり替える技術が下手ね。」

とても残念なやつを見る目だ。

「そうね。詩織さんとはメールとかではやりとりしてるけど。実際に会った事はないわよ。でも私たち、もう仲良しだから。」

「メールとかメディアだけの交流でもう仲良しなのかよ。俺にはわからん世界だ……。」

最近はチャットなどでも仲良くなっていくようだが、俺にはどうも人と対面しないで仲良くなるということが想像できない。

ところで、先ほどからおかしい会話をしてように見える。いや、まあおかしくはないかもしれないが、俺の妹が俺の幼馴染と一度も面

識がないというのはおかしいだろう。

確かに、俺が一度も家で遊んだことがなかったりすれば分からなくもないが、もちろん家でも遊んでいる。詩織は母親とも面識があるなら、なぜ一度も面識がないのかというと、この謎を一発で解ける言葉がある。

義妹だ。

空は血筋などにとらわれていうならば、「妹^{いもうと}」ではなく「義妹^{いもうと}」なのである。

ここを転校することになったのは、義父、つまり空の父と俺の母との結婚が理由だったのだ。

ちなみに俺の父親は今どうしているかは知らない。ただ、確実に言えるのは死んではないということだろう。あの化け物が簡単に死ぬとは思えない。

まあ、本当の父親の話はさておき、親父にはとても感謝している。確かに最初は抵抗があったが、魔法の勉強を手伝ってもらったりしているうちに親父とは仲良くなった。日常生活で俺たちが何不自由なく暮らしているのは、親父が働いてくれるおかげだ。親父の仕事はガーディアン。町の守護者とも言われる仕事で、誇りに思っている。

空も、俺の誇れる立派な妹だ。だから、空も親父も今は本当の妹と父親だと思っている。だから、義父でも義妹でもない。父に妹なのだ。

さて、少し話が脱線してしまったが、話を戻すと俺は転校した後、空との暮らしが始まったので、詩織と空が出会ったことはないのだ。

「そっだよな。まあ、すぐに会う機会もあるだろう。楽しみにしとけよ。」

「うん。」

「さて、明日も早いし、そろそろ風呂に入って寝るとするかな。」

ソファーから立ちあがり、背伸びをすると、欠伸がでた。

「そうだね。私も明日の下ごしらえだけしたら寝ようかな。」
空も立ち上がり台所に向かう。

「じゃあ、俺先に風呂に入るな。」

「はい。」

俺は着替えを取りに階段を上り自分の部屋に戻り、下着と寝巻を持って脱衣所へと向かった。

鏡を見ると右頬にある傷が目に入った。

斜めに刃物で切られたような古傷が今も残っている。

「この傷やっぱ目立つよな。明日は絆創膏でも貼っていくか。」

この傷をつけたアイツのことを思い出しながら、俺は風呂に入った。

町の夜

隼人はやとと空そらが家でのんびりとした日常を過ごしている同時刻に、町にあるビルの屋上で一人の少女が5匹の魔獣に囲まれていた。

魔獣は全て狼のような形状でまっ黒な毛皮を纏い、凶悪な牙と爪を黒光りさせている。黒狼こくろうと呼ばれるごく一般的な魔獣で、1匹1匹の能力は、戦闘を行える魔法使いにとっては苦戦を強いられるものではない。

だが、黒狼は群れをなして連携しながら戦うのを得意としている。なので、町を襲撃する時も群れで行動するのである。

よって、黒狼と戦う時のセオリーとしては決して一人で立ち向かわないようにすることとされている。

しかし、長い黒髪をなびかせる少女はそのセオリーに反して一人で黒狼と対峙していた。

少女には武器と言えるようなものが見当たらない。服装は至って普通のフロンティアの制服。一般生徒と違う箇所は右腕に腕章とブレスレットを付けていることのみである。

その腕章にはこう刻まれていた。「G・O・S」ガディアンオブ スクールと。

先ほども述べたように、武器を持たない少女だが、それでも少女には焦りや恐怖といったものが見えてこない。ただ黒狼の群れの動きをしっかり見据えるだけである。

両者動かずに時間だけが過ぎていく。

不意に風が吹きだした。黒狼の方から少女の方へと。

その風が吹くと同時に、目論見通りというように一気に黒狼の群れが飛びかかってきた。

黒狼なりの知恵を使った戦い方である。そんなに強い風というほど

ではないものの、やはり追い風に乘れば少しとはいえスピードは上がる。

それを利用しての攻撃を考えていたのだ。少しのスピードでも戦況を変える要因になる。たった一つその場に石ころがあるだけでも、その石ころを使えば戦闘は劇的な変化をするかもしれないのである。圧倒的な武力差があつたとしても小さな要因が結果を大きく変えることもある。戦闘とはそんな世界だ。

しかし、圧倒的な武力差がある場合戦況は変わらないことが多い。故に圧倒的なのである。

少女は黒狼の動きを見るなり、5匹が同時に飛びかかってくることで、下にわずかに出来た隙間を見つけ出した。そして、迷うことなくその隙間スライディングでかいくぐり一度黒狼たちとの距離をとった。黒狼たちもすぐ少女に第2撃を加えるために反転する。

しかし、黒狼が攻撃へ移るよりも早くに少女は右手を地面につけてこう唱えた。

アルケミー
「錬金」と。

その瞬間少女の右腕にあつたブレスレットが茶色に光り、呼応するかのように地面も光った。そして、少女は1本の刀を地面から引き抜いた。

土属性魔法の特性の1つ創造の力を駆使した「錬成」である。各属性にはそれぞれ特性がある。その中で土属性は「創造」と「治癒」の2つの特性を兼ねそろえている。少女は、「創造」の力により刀を地面から錬成したのである。

少女は刀を持つてすぐに構える。構えは剣道の中段の構え。そして、こう言った。

「たとえ魔獣であっても、倒す相手に名を名乗るのは私の流儀。」

堂々とした口調で、敬意を込めるように。

「神崎流現頭首、神崎詩織。あなた達を斬らせてもらいます。」

そういつて、腰の方へ刀を降ろして、黒狼の次撃に備えて構える。黒狼は全員で顔を合わせてタイミングを合わせるようにしてもう一度一氣に襲いかかってきた。

それに対して詩織は、居合のように一瞬ためを作り、

「炎舞壱ノ型えんぶいちのかた！！」

詩織の右腕にあるブレスレットが赤色に光りだした。そして、敵の攻撃に対して合わせるように、一撃で仕留める為の技を繰り出す。

「炎桜えんおう！！！！」

横に一閃。その後、技名の通り炎が桜の花びらのように舞う。一枚一枚の花びらが黒狼を切り裂いていく。1000枚を超える花びらは黒狼の群れを完全に切り裂いたと、詩織は思った。

しかし、一匹だけ少しタイミングをずらして飛び出していた黒狼がいた。他の4匹も楯となっていたので少々体に切り傷を作る程度で、詩織の元へとたどり着く。

詩織は油断もあり、一瞬視野に入れるのが遅れた。その一瞬で、詩織の左腕が鋭い爪で引き裂かれた。

「ぐつ。」

引き裂かれた腕から血が出る。

痛みには耐えながらも詩織は次撃を繰り出すためもう一度居合の構えを作る。

「炎舞貳ノ型えんぶにのかた！！」

再度、ブレスレットが赤く光りだした。そして、詩織は気合いを入れて叫んだ。

「炎刀えんじん！！！！」

一閃。しかし、先ほど違い次は大きく縦に。先ほどの繊細な一閃とは違い、大きな炎の刃やいばが黒狼を真っ二つにした。

「さようなら。」

戦いが終わった。黒狼たちの亡骸は光の粒となって消えていく。

「浄化」。魔獣たちが魔力による致命的ダメージを負わされた時に、光となって消えていく現象はこう呼ばれている。これが、魔獣たちの何を意味しているかは分かっていない。一説によれば、浄化された魂が来世に清浄な心を持って生まれてくるとか、他にも一説では「浄化」は、魔獣達の闇への帰還ではないかと言われている。結局真相は闇の中なのである。

「ふう。」

緊張が解けて、ふとため息をつく。

そして、刀をビルに突き刺し、

「再構築^{リバース}」と、刀を消した。

正確には、刀をビルに戻したのである。先ほどの錬金はビルから材料をとって行った。その材料をそのままにして行く訳にもいかないので、戻す作業も当然あるのである。

まあ、戻さなくてもいいのはいいのであるが、真夜中に刀を持ち歩くわけにも行かないのだ。

詩織は過去に一度、刀を持ったまま現場に移動しようとしたことがあったが、その時は町の警察に捕まり、職務質問をされて時間を取ることになった。その時、他のメンバーに迷惑をかけてしまったのである。それ以来、錬成した刀はその場に還^{かえ}すようにしている。

（まあ、あの時は会長のお陰でそこまで問題にならなかったけど。）

そんな、過去を思い出していると、不意に上からパチパチパチと拍手が聞こえてきた。

「いやいや、頑張ったわねえ。」

金色のショートヘアに黒いカチューシャをつけて、フリルのついた黒いドレスを身に纏っている、見た目が西洋の人形のような小さな少女が上方から降りてくる。

「はあ。」

呆れて。すぐく呆れて、溜息がでる。

（また、私を見ていたのね。）

「生徒長。また、私の観察ですか？暇があるなら自分も少しは仕事をすればいいじゃないですか。」

「何言ってるのですか。私の詩織観察も立派な仕事の1つですよ。」

「私には仕事をしない口実にしか聞こえませんかよ。」

この人形のような金髪少女は生徒長のディアナ・クロナ。

身長147cm体重見た目35kgぐらいの体格だ。

どうみても、中学生に見えるが、フロンティアの3年生である。

ちなみに、私は身長157cmと普通だ。

体重は気にしたらいけない。

先ほど述べたように、ディアナは生徒会長ではなく、生徒長という役職についている。

フロンティアには生徒会長とは別に、生徒長というポストがある。

学校行事やその他学校に対する権限があるのは生徒会長である。

だが、生徒長はこのガーディアン・オブ・スクールの実質的リーダーなのである。

フロンティアの生徒会には「魔獣との戦闘を行えるものしか入ることできない」、という条件がある。

そうして、組まれた戦闘のできる生徒会をガーディアン・オブ・スクール、つまり、学校のガーディアンとして機能させているのである。

そして、ガーディアン・オブ・スクールの生徒長はもつとも戦闘技術に長けたものが行い、生徒会長はもつとも事務関連の処理能力に長けたものがやるようになっていいるのである。

「詩織が入ってもう1年になるのですねえ。」

「そうですね。あれからもう1年になるんですもんね。時が過ぎるのは早いもんです。」

「ほんとね。1年前の詩織はまだまだって感じだったけど、今の詩

織を見たら、今年入ってくる新入生の面倒を詩織に任せて大丈夫だ
と思うわ。」

「今年は、生徒会に入れる新入生が多ければいいですけどね。」

「どうでしょうか。今のところ魔法具を持った新入生はいないって
話ですからねえ。」

話の通り、先ほど挙げたガーディアン・オブ・スクールへの入会条
件である、「魔獣との戦闘を行える」、という基準は一般的学生か
らの視点ではかなり高いハードルである。

それは、一般生徒のほとんどが、魔法石を形状化できないからであ
る。

この世界にある魔法石は、魔力と意思を混ぜ合わせることで、形状
を変化させる。

その形状化出来た魔法石は魔法具と呼ばれるようになる。

それは、剣であったり、弓であったり、様々な形を有するのである。
たとえば詩織なら、右腕につけているブレスレットである。

形状化した、魔法石はその持ち主の魔力を増幅させたり、詠唱を省
略させる効果、さらに、その魔法具特有の効果を持ち合わせている。
それにより、より高度な戦闘を可能にするのである。

しかし、魔法具を持たない者達は、魔力切れが速かったり、詠唱が
長いなどといった、おおよそ戦闘には向かないステータスが多くな
るのである。

だから、よほどの実力を兼ね備えていない限り、まず魔法具を持っ
ていなければ生徒会に入ることができないのである。

「まあ、現状は質がいいからどうにかありますね。」

「いくら質が良くても、量を相手するのはきついですよ。しかも、
一番質の良い人にサボリ癖があるわけですから。」

「そこは考えておきます。」

「考えないで、仕事してくださいよ。」

そんな話をしていると、ディアナの携帯が震えた。

バイブに気付いたディアナは携帯をとる。そこには、見慣れた名前と番号が載っていた。

東堂 静と。

「はあ。」とため息をつき、通話ボタンを押した。

「何をしている。」

電話越しに静かにしかし、怒鳴り声より迫力がある声がしてきた。

「ごめんね。別にサボっているわけじゃないから。今から、次の現場に向かいます。」

少し間があき、

「そうしてくれ。俺たちは人手が足りないんだよ。」と言われた。

まだ、激怒はしてなかったようだとい安心する。

「分かったわ。ところで静、今年の新入生でウチに入りそうな子はいる。」

「新入生にはいないな。だが、お前もとても気に入る奴が一人いるはずだ。お前絶対にリストに目を通していないだろう。」

「ヤバイ、と心の中で焦り始める。」

「いやいや、そんなことはないよ。ただ、覚えてられないだけだよ。」

「

「まあいい、お前たちには早く次の現場に動いてもらわなければいけないからな。そのつのプロフィールを送っておく。どうせ、2人で確認するのだろうから、見たらさっさと動けよ。」

「はい。」

電話を切るとすぐに静からのメールが来た。

（相変わらず仕事が早いわね。）

「詩織ー！！静が気になる人のプロフィールを送ってきたから見てみない？」

見てみると、詩織は先ほど黒狼にやられた傷の治癒をしていた。私の電話が長引くと思ったのであろう。

ブレスレットが茶色に光っているので土属性の治癒を使っているのだ。

「ちょっと待ってもらっていいですかー？」

「いいわよ。しっかり治しなさい。」

と、即答で返す。

しばらくして、詩織が私の方にやってきた。右腕の傷は完全に癒えていた。

「お待たせしました。さあ、生徒会長が気になるっていう人を見せてもらいましょうか。」

「静が気になるっていうほどだから、すごい人材だと思うんだけど、その割に噂がないのよね。」

そういいながら、プロフィールを開いてみると詩織とディアナはそれぞれ驚いた。

そして、ディアナはこういった。

「確かに楽しみな人材がここにやってきたわね。」

ディアナは不敵な笑みを作った。

その笑みが、詩織には何を意味しているのか全くわからなかった。

ただ、詩織はプロフィールの人物がなぜディアナや静の興味を惹かせるのかを考えていた。

そう、自分の幼馴染の来島隼人。

彼に一体何があるのかを。

始まりの朝

夕陽の佇む公園に、俺は立っていた。なぜ自分が、こんな所にいるのかは俺にも分からなかった。

しばらく公園を眺めていると、ジャングルジムの上で座っている少年と少女がいた。

（あれは・・・）

あの二人には見覚えがあった。というより、幼き日の俺と詩織だった。

（ああ、そうか。これは夢だ。）

夢の中で今自分は夢を見ているのだと実感することは、少し変な気分になった。

（てか、この状況年を取るとスゲーロマンチックに見える。）

ジャングルジムの上で、沈んでいく真っ赤な夕陽を見ている2人はとてもどもには見えない。そんな事を考えていると、2人がなにやら話し始めた。

「はやとくんの将来の夢ってなあに？」

「うーん。やっぱり、お父さんとおんなじガーディアンになりたいなあ。」

小さな俺は純粹だった。今の俺の夢もガーディアンであることは間違いない。だが、ここまで純粹に将来の夢がガーディアンと言うことはできなくなった。

「はやとくんのお父さんカッコいいもんね。」

「うん。ぼくのお父さんすごくカッコいいよ。」

ここでいうお父さんとは、俺の実際の親父である。

俺の親父は幼き日の俺に、いや今の俺にもカッコよく映っている。

ガーディアンのお父さんグループに立っていて、マスコミなどにもたまに取り上げられていた。

悪の魔獣と戦い、正義を為す。テレビの戦隊ものではないが、そんな親父の姿が俺の誇りだった。

そんな親父が俺の心を驚掴みにして、いつの日か親父と並んで魔獣と戦いたいと思うようになっていた。

「そうかあ。ガーディアンかー。私もガーディアンになろうかな？ そしたら、いつも一緒に入れるよね？」

「そうだよ。しおりちゃんも一緒にガーディアンになろう！ーそして、2人でみんなをまもっていくんだ！ー」

「うん！ー約束だよ！ー！」

2人は互いの右手の小指を出して絡ませた。
そして、

「「ゆびきりげんまんうそついたらはりせんぼんのーます。ゆびきつた！ー！」」

と約束を交わした。

「「えへへ。」」

とても無邪気な笑顔で笑っていた。

その2人の姿はとても純粹で、そして、とても輝いて見えた。
遠い遠い過去の記憶だった。

「お兄い、朝だよ！ー！」

はつきりしない意識の中空の声が聞こえてきた。

反射的に俺は誰でも言うようなベタな一言で返した。

「あと5分。」

春眠暁を覚えずとは良く言ったものだ。布団の魔力に支配された俺は、どうしても布団から出たくなかった。

「起きないと遅刻しちゃうよ？」

「5分くらいなら大丈夫だよ。」

朝の貴重な5分間だ。大切にしなければ。

「もう。5分したら起きてきてよ。」

「あいよ。」

そう言ったら、空は部屋から出ていった。

（懐かしい夢をみたな。）

詩織と交わした幼い日の約束。今だってそれを叶えようと思っている。

そして、親父は今でも俺の目標であり、いつかは超えたい壁だ。

（だけど・・・。）

俺の中での葛藤がまだある。俺の不安はまだ取り除かれない。

（でも、いつかきつと叶えてみせる。）

その後布団にくるまっていた俺は、空が再度襲来するまでの10分間布団から出ることはなかった。

「まったくお兄いは、何でそんなにだらしないのよ。」

「わりいわりい。布団があんまりにも気持ち良くて、起きるのももつたいないなと思つて。」

空に叩き起こされた俺は、洗面所で顔を洗い、リビングに来た。

なかなか起きなかった俺に対して空はご立腹のようだ。

朝に弱いというより、あの布団の気持ちよさに負ける人間は多いだろうに。と俺は思う。

それでも、律儀に俺を起こすために早起してくれた上に、朝ご飯まで用意してくれている妹に対して、俺も誠意を見せなければならんだろう。

「悪かった！今度俺が起きなかったときは、何か好きなもの奢つてやるから今回は見逃してくれ。」

両手を合わせて、頭を下げる。

ここで、土下座をするという手もあるだろうが、そこまでする必要もないだろう。

「ちよつと頭が高いんじゃない。」

・・・ついさつき考えた土下座が脳裏をよぎった。

だが、よく考えてみよう。男の、いや男に限らず、人類（土下座は日本の文化であるから、日本人という表記の方が正しいだろうが、

あえてそう言わせてもらう。(の土下座はそんなに安いもんじゃない。

朝起きれなかったぐらいで土下座なら、俺は1日に何回土下座をし
なければならんだ。

そう考えると頭が高いという言葉は、たんにそのままの意味で捉え
ればいいのだろう。

「本当に悪かった!!」

さらに深く頭を下げる俺。これで許してくるだろう。

「お兄い。朝ご飯抜きがいい?」

「まじか!!土下座しろつてのか!?!」

この時の俺は相当驚いた顔にをしていただろう。

だってそうだろう、いくらなんでもそれはひどい。

たった1日起きなかっただけで、我が妹から土下座を強要されるな
んて思いもしない。

我が妹は血も涙もない悪魔みたいに育ってしまったのだろうか。

どこで教育方針を間違えたのだろう。

「ねえ。お兄いはほんとにご飯抜きでいいの?」

人を見下すような、そんな顔で俺を見てくる空。

(確かに、俺が悪いんだ。しかたないんだ。)

ただ、朝起きれなかっただけのことなのに、罪がここまで重いとは。
意を決して、俺は床に膝をつき正座をする。

そして、両手を床につき頭を下げた。

THE DOGEZAである。

それは綺麗な土下座だっただろう、おそらく今までしてきた中でも
?1の土下座だ。

てか、土下座なんてほとんどしたことないけどな。

しかし、空からの反応が一向になかった。

どうしたのだろう。まだ不満があるのだろうかと思ひ上を見上げて
みると。

そこには、口を押さえて必死に笑いを堪えている空がいた。

「あはは、あつははは！！」

笑いの堰が決壊した空はついに腹を抱えて笑いだす。

本当に愉快そうだった。

「あはは。お兄い、本気にしすぎだよ。ひひ。朝起きない程度で、ふふそんなに怒るわけないじゃん。あーおなかイタ。」

「お前な、ふざけんよ。こっちは本気で怒ってると思ったから、本気で謝ったんだぞ。」

次は俺がキレそうだった。こっちが誠心誠意を尽くし土下座までしたのにこれはない。

俺は立ち上がって空をみた。ほんとに愉快そうだ。とても楽しそうだった。

その顔を見てるとこっちもどうでも良くなってきた。

まあ、俺が起きなかったのが悪いしな。ここでキレるのも理不尽だろう。

「で、朝ご飯は？」

「うん。もうすぐできるから座って待ってて。ぷつ。」

まだ、笑えるらしい。

空と2人きりの食事も終わり現在学校へ行く準備中。

親父と母さんは仕事で俺が起きるよりも早く出勤したらしい。

親父の職業はガーディアン。

そして言っただけでなかったと思うが、母さんの職業もガーディアンなのである。

親父は日本のトップランカーに入るガーディアンで、母さんはそのサポート役として2人でコンビを組んでいる。

俺たちがこのフロンティア区に引っ越してきたのも2人の仕事の都合（主に親父主体ではあるが。）である。

フロンティア区は何かと魔獣被害が多い都市なのである。

そこで、増え続ける魔獣被害の負担を少しでも減らすために、2人

の力を貸してほしいということになり転勤することになったのである。

まあ、2人の力は日本を護るためには必要なものだ。そんな2人の転勤を俺と空は温かく迎えた。

「さてと、準備は済んだし、そろそろ学校に行くかね。」

俺は新しく着ることになったフロンティアの制服を身にまとっていた。

上は紺のブレザーに白いワイシャツ、赤いネクタイ。下は灰色のスラックスという普通の制服だ。

右頬には絆創膏を付けて、古傷を隠している。

充電器につけてある携帯をとって見てみると、メールが来ていた。

（誰だこんな朝早くから。）

みてみると、送り主は詩織しおりだった。

—— 8時頃、公園で待つてるね。一緒に学校行こう。 ——

とのことだった。受信が3分前になっているので、俺が来るかどうか不安にさせてもいけないと思い、OKと簡単に返したあと、携帯をバックに入れた。

（道に迷っちゃいかんし、そろそろ家を出ておくか）

忘れ物がないようにチェックして玄関まで行く。

「じゃあ空、少し早めに行くことにするわ。」

「うん。その方がいいと思うよ。道に迷ったりすることも考えられるしね。」

「俺もそう思ったところだ。留守番頼んだぞ。」

「別に頼まれるほどのことじゃないと思うんだけどね。いつてらっしゃい。」

「おう、いつてきます。」

といって、俺は家を出た。俺は疑いもなく何気ない日常が始まると思っていた。

歩いて5分くらいの距離に公園はあるはずだから迷うことはないと思うが、それにしても町の印象が昔とだいぶ変わっている。多少はあった田んぼや、畑などは姿を消しており住宅街になっている。

少し遠くを見渡せば、ビルなども以前より多く立っていて、景色は面影を残してはいなかった。

このクロイス区は俺のいない10年間で急成長している。

魔力を使った魔動機を大量に生産できるラインを確立して以降、町はバブルのような勢いで変化した。

フロンティア魔法学校も8年前に設立されたもので、一気に一流魔法学校へと成長した。

変化がものすごい勢いで起こり、現在は世界でも有数な都市である。（ホント、すごい変わりようだよ。）

心の底からそう思えずにはいらなかった。

あまりにも面影のない町は、自分がこの町を全く知らないとなさえも感じさせるのだが、意外と公園までの道のりは覚えていた。

（ここを右に曲がれば公園だな。）

と右に曲がったところで、とんでもないものが目に入った。

フロンティアの制服を着た女子が、両手では数えきれないであろう数の魔獣に囲まれていたのだ。

そして、その女子の顔立ちには心当たりがあった。

公園で待ち合わせをしていた俺の幼馴染詩織だ。

激闘の幕明け

「どうしてこんな時に。」

詩織しおりは嘆いていた。

（私は日頃の行いが悪いのかな。）

昨日も散々相手にした黒狼20匹ほどに囲まれていた。

黒狼たちは綺麗に円陣を作り、詩織を包囲していた。

「今日は朝から気合を入れて髪をセットしてきたのに。」

10年ぶりに出会う幼馴染との再会を楽しみにしてたのに。

さっきメールを送ったら、一緒に学校に行けることになってウキウキしてたのに。

「全くもう。」

ブレスレットが茶色に光、錬成により地面から刀を取り出す。

本当に間の悪い奴らだと思った。

「どうしてくれんのよ!!」

怒声と同時に構えを作り、行動に入る。

「炎舞えんぶハノ型かた!!」

ブレスレットが赤く光、詩織はその場で回転し始める。

「炎陣!!」

弧を描く太刀筋で、敵をなぎ払おうとする。

しかし、黒狼たちは一歩引いて、詩織の攻撃を受けないようにした。詩織の刀の軌跡の炎が弧を描いていて黒狼たちが詩織に近づけないように炎の壁を作った。

炎陣は360°の範囲攻撃ではあると同時に、自分の範囲を守るための技だ。

当たったとしてもダメージになりにくいのがネックではあるが、距離を取ることは優秀な技だった。

（だけど、この数相手じゃ守りに入りすぎるのも危ない。まずはこ

の包囲網を突破しないとね。」

現在20匹の黒狼とは先ほどより距離を取ることに成功したものの、綺麗な円陣を崩さないでいる。

思考を巡らせる。この事態を收拾するための最善の策を。

（やっぱり、一点突破するしかないかな。その後包囲網の外からまとめて炎桜^{えんおう}で決める。全部まとめて、消すことはできなくても、これで状況が少しは改善されるはず。）

そう決めると行動に移すのは早く、すぐに次撃に備えて構えを取る。

右手を後ろに引き、左手を峰に添え。

「炎舞参^{えんぶさん}ノ型^{かた}！！炎槍^{えんそう}」

鋭い突きが炎の渦をつくり、一点へと飛ぶ。

渦は周囲の黒狼たちを飲み込んでゆく。

陣形を崩すことに成功し、突き崩した穴に向けて駆け出す。

（よし。そこを抜けたら、炎桜で。）

「残念。そこは畏^{おそ}ってやつだ。」

そこには周りこんできたであろう二足で立っている狼がいた。

大きさも普通の黒狼の倍はある。

体つきがよく、人間であればボディービルダーのようだ。

「ワーウルフ」、日本語で人狼。抜けようとした穴にはそれがいた。

「魔人」。魔獣が進化した姿。魔獣も生物である以上強くなるのである。

強くなってきた魔獣は形を変えて魔人へと進化するのである。

魔人は魔獣と違い各々の意思を持っている。

知識の面でも成長するため、より強力な相手となる。

しかし、そのため何百の魔獣を倒してきた詩織自体、魔人と出会うのが初めてなほど希少な存在なのだ。

そんな希少な存在が今この場にいた。

先ほどまでは、姿も見えなかったはずなのに。

「なんで、魔人がこんなとこにいるのかって顔だな。魔人には、た

まに進化前の姿に化けられる奴がいるのさ。覚えときな。まっ、いまここで死ぬだけだな。」

高く挙げられていたワーウルフの鋭い爪が、詩織の胸にめがけて振り下ろされた。

（避けられない。）

詩織は死を覚悟した。

走馬灯のようなものが頭によぎる。

お父さん、お母さんの顔。つらかった剣道の稽古。ガーディアン・オブ・スクールでの毎日。

そして、夕陽で少年と約束を交わした時のことも。

（隼人くん。）

恐怖で目をつぶる。

しかし、その爪が自分の胸を貫かないことに詩織が気付くまで数刻しかかった。

黒髪の少年がワーウルフの爪を銃で受け止めていたのだ。

（この人ガーディアンの方？）

しかし、その少年はフロンティアの制服を着ていた。

さらに言っと、フロンティアの生徒に銃の魔法具化をしたものもない。

ならこの両手に銃を持っているのは誰なのか。

そう考えていると、少年はこういった。

「危なかったな。」

少年はそう言っただけ振り向いた。

「大丈夫か詩織。」

その顔は昨日見た写真にいた少年。私の幼馴染、くるしまはやと来島隼人だった。

銃と相棒

突如、両手に銃を持って現れた隼人君^{はやと}は右手に持った銃でワーウルフの爪を受け止めた。

銃は両方とも銀色の自動拳銃式である。

普通より大きく相手の攻撃を受けとめる際にも使えるようだ。

爪を受け止めている状態で隼人君は左手の銃を使いワーウルフを撃った。

その銃口から発射されたのは光弾だった。

ワーウルフは咄嗟^{ひるがえ}に身を翻して光弾を避け、隼人君と距離を取った。

「大丈夫か？」

隼人君は振り向いて私を見てきた。

「う、うん。」

と、私は反射的に返事をした。

私はすごく驚いていた。

隼人君が私のピンチに駆けつけてくれたのだ。

それは、所謂^{いわゆる}白馬に乗った王子様といったところだろうか。

俺は詩織^{しおし}の体を見て、傷がないことを確かめると安心して一息つく。

「1人で魔人を相手にしようなんて危ないぜ。せめて、2人で相手にしないと。」

まだ状況を飲み込めていなさそうな詩織は、コクつとうなずいた。

「まあ、よかったよ。」

そして、俺は振り向いてワーウルフを見据えた。

「なんだ、てめえは？」

振り返ると、ワーウルフは俺を睨みつけてきていた。

「俺か？」

ワーウルフをにらみ返して怒りを込めてこういった。

「俺はこの子の幼馴染だよ!!!」

そういつて、俺は光弾を打ち出した。

光属性。火、水、雷、風、土、そして光と闇。7属性のなかでも最も希少な属性。

俺はその光属性の力を有していた。

ワーウルフは光弾を避けてさらに後ろに下がった。

「てめえ。」

鋭い眼光が俺を見つめる。

「やれ。黒狼共!!。」

俺と詩織を困っていた黒狼たちが一斉に飛びかってくる。

しかし、焦ることはない。

ワーウルフに黒狼たちがついてるように、俺にも頼りになる相棒がいる。

（3時、5時、9時、11時の方向の黒狼がタイミングをずらしてきてる黒狼が1匹ずついるです。）

「サンキュー。」

俺は相棒の指示を聞き、行動に移る。

まずは、時計周りに飛びかかってきている黒狼たちを一掃する。

狙いは外れることなく全員を撃ち落とした。

その後すぐに、タイミングをずらしてきていた黒狼たちの攻撃の避ける行動に移る。

（1時の方向にはワーウルフが待機してるです。）

「あいよ。」

すぐに詩織をいわゆるお姫様だっこで持ち上げる。

「えっ。ちよつと。」

恥ずかしそうに詩織は顔を赤面させる。

気にせず俺は、ワーウルフが待機しているのとは逆の7時の方向に抜けて詩織を降ろす。

その後4匹に一発ずつ撃ち込んだ。

さらに、指示の通り1時の方向に待機していたワーウルフを視認して、左右の銃を連射した。

ワーウルフは油断していたのだろう。

反応することができず、光弾を数発受けて地面を転がる。

「ぐう。感のいい奴だな。」

ワーウルフは立ちあがりながらそう言った。

「感じやねえよ。俺の頼りになる相棒のおかげだ。」

（頼りになるなんて照れるです。）

相棒は照れていた。

「それで、これで終わりか？」

ワーウルフを睨みつける。

「ふっ。てめえみたいなガキにここまでいいようにされるとは思ってたよ。」

ワーウルフはいまわしそうに俺を見ってくる。

「どうやらてめえは一筋縄でいく相手ではないようだな。戦い慣れしてる感じた。だが、てめえは俺様の本気を相手にして後どのくらい保つかな？」

「お前が本気になったところでどうってことねえよ。」

「言ってくれんじゃねえか。てめえのその自信叩き折ってやるよ。」
不敵な笑顔をした。

同時に、ワーウルフの周囲の魔力が濃くなっていくのを感じる。

周りには黒いオーラが集まってきた。

「うおおおおおおおおお！！」

ワーウルフは黒いオーラを纏い、徐々に大きくなっていく。
「リミットブレイク限定解除！！」

黒いオーラが完全にワーウルフの体を包み込んだ。

そして、次の瞬間黒いオーラは爆発するように拡散した。

その衝撃で突風が吹き荒れる。

俺は突風に耐えながらも相手から目を離さない。

徐々にオーラが薄れていき、ワーウルフの姿が明らかになっていく。
そして黒いオーラの中から現れたのは、巨大な黒狼だった。

推定で体長2 m 5 0 c m、黒狼と同じく鋭い爪と牙を有している。
先ほどよりも一層魔力を強く感じる。

その姿は黒狼にとっても酷似しているので、大黒狼^{だいこくろう}とでも言おう。
大黒狼は閉じていた目をゆっくりと開いた。

鋭い眼光が俺を見据える。

「潰す。」

大黒狼が構える。その動きを見て俺は詩織をみる。

「詩織下がっておけ。」

「えっ。いやよ、私も戦う。あんな奴に一人で立ち向かうなんて無理よ。」

詩織はそう答えた。

そう言われるとは思っていた。

しかしこの場合俺は、詩織には残酷なことを伝えるしかなかった。

「頼む下がっておいでくれ。お前をかばいながらアイツと戦うのは結構キツイんだ。」

真剣なまなざしで見つめる。

答えを貰うまでの時間がだいぶ長く感じる。

だめか、と思いかけたその時、詩織が口を開いた。

「わ、わかったわ。その代わり危なくなったら、勝手に乱入するか
らね。」

「ああ。ありがとう。」

「それじゃあ、無茶しないでね。」

そういうと、詩織は後ろの方に下がっていった。

「さて、待っていてくれてありがとうよ。」

まずは、詩織との会話中ずっと動かなかった大黒狼に礼をいう。

「別に礼を言われる筋合いはない。ただ、てめえのプライドを完膚
無きままにズタズタにして殺したいだけだ。」

大黒狼は本当の意味で俺を潰したいらしい。

下手なプライドがあるところが魔人らしい。

プライドも何もなくなつただ本能のままに人を襲うだけの魔獣や、人を殺すことだけに快楽を覚える魔人とは違う。

強さを誇示したうえで、相手を潰すタイプだ。

「そうかい。じゃあ、俺も全力を出すぜ。」

そう言つて、俺は首飾りを持った。

「リル出てこい。」

すると、首飾りが光、次の瞬間とても人形サイズの可愛い女の子がでてきた。

黄色主体の着物を着ていて、羽衣を纏っている。

髪は腰ぐらいまであり、顔は幼い印象を受ける。

「久しぶりに外に出れましたです。うれしいです。」

外に出れたことで、とてもはしゃいでいる。

俺の相棒のリルである。

「そのちつちえ嬢ちゃんがてめえの切り札か？」

「ああ。俺の相棒だ。俺の魔法具は特殊でセットになっているんだよ。それがこの両手銃とリルだ。まあ、俺はリルを魔法具だとは思つていないんだけどな。リルは相手の探知とかが得意でな、俺の相棒として戦闘でのサポートをしてもらっている。」

リルを撫でてやる。とてもうれしそうな顔をするリルを見ると、とても心が和む。

「まあ今回はサポートだけじゃなく、防御してもらおうと思つてな。」

「そうです。リルは優秀な盾なんです。狼さんじゃあ、私の盾を破ることはできないです。」

えっへんとリルは両手を組む。

「どうでもいいから、早く準備しろ。どうせ、そのままじゃあ盾にもならんのだろう。俺はさつさとてめえを潰したいんだ。」

大黒狼はそろそろしびれを切らしそうだった。

「あいよ。リル^{メタモルフォーゼ}形態変化だ。」

「はいです。」

リルが光り始める。その姿が変わり、同じ形の6個の盾が俺の周囲を浮き始めた。

形は大きな六角形で堅そうである。しかし、盾の上部には天使の羽根のようなものがついていて可愛らしいデザインとなっている。

『六花の盾^{りっか}_{たて}』。これが、リルの盾としての姿である。

ちなみに、この名前を付けるときにリルとは少しもめた。

それはリルが、ブローディアという花をとて好いているからである。

ブローディアの花言葉は守護。

花びらの数も6枚とリルの能力と重なるところが多いのである。

そこで、リルはブローディアの盾やら、ブローディアシールドやら、ブローディアの名前を入れた、盾の名前を提案してきたのである。

だが、幼かった俺は盾に花の名前を入れるのがダサイと思った。

もっとガーディアンシールドとか、ハイパーシールドとか、今思うとブローディアシールドの方がいいと思うような名前を考えていたのだ。

そこに、母さんが入ってきて、二人の意見を聞いた後、六花の盾という名前を提案してくれたのだった。

幼い俺は六花という響きにカッコよさを覚え、リルは花が盾にっていたことから、妥協しあいこの名前がついたのである。

まあそんな昔話はおいておき、この盾は花言葉どおりどんな時でも俺を護ってくれる鉄壁の花となった。

いまじゃ、大事な戦いではこの盾は不可欠ともいえる。

信頼をおける盾をみながら俺は、

「さてと、じゃあやりますか？」

と本当の戦いの火蓋を切った。

激闘！！大黒狼！！！！

メタモルフォーゼ
リルを形状変化をさせてすぐに、だいくろう大黒狼と俺、くるしまはやと来島隼人の戦いが始まった。

先に仕掛けてきたのは大黒狼だった。

大黒狼の周りに魔力が集まったかと思うと、周りに黒弾を出していた。

数は10個。

大黒狼は10個の黒弾を俺目がけて飛ばしてきた。

「シフトD6！！」

俺はリルに指示をだす。

イチ・プロテクション
「各個守護！！」

6枚の盾はそれぞれで障壁を発生させ、黒弾を防ぐ。

これが、六花の盾の能力の1つ目、「花びらの守護」である。

1枚1枚の盾が障壁をだし、各個で攻撃を防ぐ。

細かい多数の魔法を相手にする時に非常に便利な能力なのだ。

それをみた大黒狼は、次の行動に移る。

2m50cmを超える巨体が、高速スピードで突っ込んできた。

その行動を見て俺は、冷静にリルに次の指示を出す。

「シフトD4！！残りの2枚は待機だ！！」

（了解です。シフトD4を適応するです。）

俺が銃を構えているうちに、6枚の内4枚の盾が俺の前に並ぶ。

残りの2枚は俺の周りを浮遊している。

コンセントレーション
「集結！！」

4枚の盾が集結して、4枚の花びらで作られた、花のような盾ができる。

「シールド展開！！」

命令をだした瞬間、花のような盾の前に魔力が集まり、大きな障壁

ができた。

大黒狼は障壁を恐れてスピードを落とすことなく、突進してくる。しかし、障壁は揺らぐどころか大黒狼を吹き飛ばした。

六花の盾の能力2つ目の、「花の盾」である。

各盾を1ヶ所に集結させることで、花の形をした大きな1つの盾として機能させる。

盾の数次第でその防御力は変わり、最大枚数である6枚の集結を行えばそう簡単に破られない、最高峰の盾となるのである。

俺は吹き飛ばした大黒狼に狙いを定めて、左右2発ずつ撃った。綺麗に奴の体に命中する。

大黒狼は地面に数回体を打ち付けて、最後は壁にぶつかった。

あの巨体がすごい勢いで転がってぶつかっても、壁はビクともしていなかった。

このクロイス区には、頻発して魔獣関連の事件が起こるための措置として、各建物や公共施設、道路などには結界を張るようという条例が存在するのである。

その結界のお陰である程度の戦闘行動を行っても、街が壊れたりすることがないのである。

さて、すごい勢いで吹き飛んで行った大黒狼だったがなんというとはなく立ち上がる。

「すげえ盾だな。確かにあの嬢ちゃんはおまえにとつての切り札のようだな。しかし、いかに素晴らしい盾を持っても攻撃力不足だとジリ貧になるぜ。」

どうやら、普通に光弾当てても奴には大したダメージにならないらしい。

「大丈夫だ。お前が俺の攻撃力が不足してると思えるのは今のうちだけだよ。」

「大口叩いてると後悔するぞ。」

大黒狼の周りに再び魔力が集まり、黒弾を出す。

今度の数も10個。

10個が奴がだせる黒弾の最大数なのかもしれない。

（リル、出来れば4枚であれ全てに対応してほしいんだが？）

（バーストを使うですか。難しいです。先ほどの攻撃を見ると狼さんの黒弾は完全な同時射出はできないようです。しかし、誤差も僅かなものです。せめて、5枚は欲しいのです。）

リルは悩んでいるようだった。

（俺も回避行動は取れる。それで何とかならないか？）

（ギリギリですが、分かったです。私も全力を尽くすです。）

俺たちの行動は決まった。

すぐに右の銃を奴に向ける。

右の銃の銃口を2枚の盾が回り始める。

2枚の盾から魔力を銃に流れていく。

銃が魔力を取りこんで徐々に輝きがます。

その間に大黒狼は、黒弾を打ち出してきた。

4枚の盾がそれぞれ黒弾を防ぐ。

しかし、2発ほどは盾を抜けてこちらに飛んでくる。

だが、そこはさすがリルというべきだろう。

リルは俺が避けやすそうな黒弾を残してくれていた。

おかげで俺は、左、右と一回ずつ飛ぶだけで黒弾を避けることができた。

その間に銃の光はさらに増していた。

（充電完了です。バーストいけるです。）

銃を大黒狼の方に向ける。

「喰らいやがれ！！」

今までの光弾とは違い、光のレーザーが飛んで行った。

これが、俺の攻撃の要となる「バーストショット」である。

この銃は俺からの魔力を一定量までしか溜めることができないようになっている。

しかし、盾つまりリルを通すことで銃は魔力をさらに溜めることができるようになっていいるのだ。

何故かは分からないがとりあえずメンドクサイ攻撃方法である。

光のレーザーは一直線に大黒狼の方に飛んでいき、命中した。

「ぐああああ！！」

間髪いれず、光弾を撃ち続けた。

ドオン、ドオンと光弾が炸裂する音とともに土煙りが起こる。

撃つのをやめて土煙りが晴れるのを待つ。

（あれだけの攻撃を受けて無事なはずはない。）

徐々に、土煙りが晴れていく。

しかし、そこには大黒狼が普通に立っていた。

「どうした。これが限界か。今のは確かに効いたが、俺はまだ余裕があるぞ。」

大黒狼の体を見ると、ダメージは与えられているようだが、致命傷には至らないようだった。

（クソ。柔らかそうな体してるくせに、結構堅いな。）

確かに余裕がまだ見える。

「てめえのその技は溜めがいるみたいだな。さらにその間盾の数が減る。これはなかなか戦いにくいんじゃないか。もうてめえに溜める時間もやらんぞ。」

「まだまだ手はあるさ。」

しかし、確かにこちらの手が限られてきている。

この状況は少し苦しい。

だが、まだ手はある。

奴の、いやどんな生物でも必ず柔らかい場所はあるのだ。

そこを狙って戦えばいいのだ。

「そっちが止まっているならこちらから行かせてもらおう。」

大黒狼が再びこちらに向かってくる。

「シフトD6だ！！」

「わかったです。」

こちらも、大黒狼に向かって駆け出す。残り3メートルぐらいまで接近したところで、大黒狼は腕を振り下ろしてきた。

それを、右に飛んで避けると、避ける位置を予測していたのであるう、俺に黒弾が飛んできていた。

盾が1枚俺と黒弾の間に入り込んで防御してくれた。

盾と黒弾がぶつかりあい、衝撃を生んだ。

その余波で俺は僅かに体勢を崩した。

そこを見逃す大黒狼ではなかった。

すぐに、先ほどと逆の腕を振りかざしてくる。

俺もすぐに反応して、腕に向けて光弾を撃った。

その反動で俺の体が動いたこともあり、腕は俺のやや横の地面を勢いよく叩いた。

その隙に俺は大黒狼の正面に位置取り、大黒狼の顔面に向かって光弾を撃つ。

大黒狼は咄嗟に顔を反らして、光弾を避ける。

避けた光弾は大黒狼の肩に命中する。

俺は継続して大黒狼の正面を取るようにする。

そして、また顔面に向かって光弾を撃つ。

大黒狼の攻撃は俺が回避行動を取り、黒弾が来た時はリルの盾を使う。

うまく役割を分担しながら、絶妙なポジションを取って攻撃を繰り返す。

「クソが!!」

大黒狼が突然口を開いた。

口から黒弾を出そうとしているのを見て、俺は待つてましたとばかりに、口の中に向けて光弾を撃った。

ドオオンと中で光弾と黒弾が混ざって爆発する音が聞こえた。

「ガアアアア！！！」

悲鳴をあげた後、大黒狼は倒れた。

「どうよー！！」

いくら光弾を体に受けても平気な奴でも、内部にダメージを与えれば効く。

さらに、自分の黒弾と俺の光弾が混ざって内部で爆発したのだ。

さすがのこいつでもこれは大きな痛手だろう。

「さてと、これで最後だ。リルシフトA4だ。」

（はい。）

盾が4枚銃口の周りを飛ぶ。

「ふざけるなあああ！！黒狼共やれええええ！！」

（・・・はっ。黒狼が5体突然出てきたです。後ろから来てるです。）

振り返ると黒狼が5体こちらに襲いかかってきていた。

「俺の特殊能力を見誤ったな。俺は黒狼を召喚する能力も持つてるんだよ。」

黒狼たちが飛びかかってきて、その爪で俺を引き裂こうとしてきていた。

攻撃に回した盾を戻すには時間がかかる。

さらに、4枚でバーストを撃つ時、俺は行動が制限され満足な回避行動を取ることができない。

残り2枚の盾が俺を護るが、数が足りない。

「詰めが甘かったな。チエックメイトだ！！」

盾を抜けた黒狼の爪が俺めがけて振り下ろされた。

その距離1メートルほど。

1秒後には俺はあの爪に引き裂かれる。

万事休す。

そう思った。

しかし、その瞬間俺と黒狼の間に1人の少女が割って入った。

「炎舞^{えんぶ}壱^{いち}ノ型^{かた}！炎桜^{えんおう}！！」

少女が刀を横に一閃。

炎の桜が舞い散った。

黒狼たちは炎の桜によって引き裂かれて、浄化されていく。

「なっ！！」

俺は驚きで声を上げる。

先ほど同じようなシチュエーションにあった彼女を俺が助けたのだ。刀を持った少女詩織^{しおり}はこちらを見て笑いかける。

「言ったでしょ。危なくなったら私も乱入するって。」

詩織のやってやったというような顔を見て、俺は

「ありがとうよ。」

と返答した。

そして、戦いの幕引きも来たようだった。

「さて、俺にはあと1人相棒がいたようだ。俺も予想外だったんだ。

怨むなよ。」

銃の光が増した。

（充電完了です。）

「あばよ。」

俺は引き金を引いた。

「クソがあああ！！」

大黒狼は捨て台詞と同時に光のレーザーに飲み込まれた。

光のレーザーは先ほど撃ったものの倍はあっただろう。

レーザーが消えた後には、大黒狼の跡は全く残っていなかった。

魔人との戦いは終わった。

再会×3

大黒狼との戦闘が終わった安堵感から俺はふうーと息をはいた。

（結構苦戦したです。）

リルも今回の戦いでは疲労を隠せないようだ。

魔人と1対1で戦うのは俺たちも初めてのことだったので当然だろう。

「リル。周りに魔獣たちの反応もない。もう盾の姿をしなくてもいいぞ。」

リルを盾化している時は、俺も少し探知系の力がつくので周りに魔獣がいないことは分かった。

（はいです。こちらでも確認したので戻ります。）

リルは盾の姿から、可愛らしい人形のような姿に戻った。

「疲れただろう？少し休めよ。」

「できれば、まだ外にいたいんです。隼人はなかなか私を外に出してくれないんですから。」

リルは顔を膨らましてそういった。

「どうせ、詩織にもばれてるんだ。あまり目立たない所なら帰り道の最中にでも外に出してやるから休んでおけ。もし、またいざって時が来て、お前が使い物にならなかつたら俺も困る。」

リルはまだ顔を膨らませたまま少し考えを巡らせた後、

「しょうがないです。では、約束です。帰りに外に出すです。」
と言った。

「ああ。約束だ。」

そついうと、リルは首飾りの姿に戻った。

そして、詩織の方を向き、

「詩織しおありがとうな。助かったぜ。」

と俺は改めて礼をした。

「まったく。あれだけ自信あり気に俺に任せろって言うから、勝算があるんだろうと思っていたのに、本当に危ないんだから。」

「でも、詩織も戦闘が出来るなら途中までは完全に俺のペースだったのは分かってたんだろ？」

俺は銃を携帯ストラップの形態に戻しながら聞いた。

詩織は手に持っていた刀を地面に刺す。

それと同時に、詩織のしているプレスレットが光を放ち刀が消えた。錬成の能力だろう。

俺は何年も詩織と連絡を取っていたが、自分の魔法具について話すことはなかった。

それと同じで、詩織も自分の魔法具について教えなかったのだろう。ついさっきまで、俺は詩織が魔法具を持っていて、戦闘を行っているなんて思ってもいなかった。

「まあね。でも、最終的に言って結果が全てでしょう。戦闘に過程は関係ないよ。そうなると、完全に隼人君はやとの負けだよ。」

詩織は腕を組みながら横を向き右手の人差し指を立てて俺の方を指し揺らしながら諭すように言う。

「まあ、そうだよな。なんか悔しいな。」

確かに、あれでは俺の負けだ。もし詩織が介入してこなければ、俺と大黒狼は逆の立場になっていただろう。

初めて魔人と1対1の戦闘をしたからだといって、それは言い訳にしかない。

実質上俺の負けだったのだ。

「俺もまだまだってことだな。」

「そうだね。私もだよ。」

「「はあー」」

と2人でシンクロしたように溜息をつく。

そして、2人で顔を見合わせる。

「っぷ。あはははは。」

それが、急に可笑しく感じて2人で笑いあった。

しばらく笑いあった後、俺は詩織に言わなければいけないことを言おうと思った。

「詩織、あのさ。」

「なに、改まって。」

俺は詩織の方を向く。

だが、いざ向かい合うとなかなか口に出すのは難しい。

「いや、そのさ。なんというか……。」

「なんなのよ、もう。」

なかなか切り出せない俺に詩織もしびれを切らしそうだった。

「ちよつと待ってくれ。」

ふうーと息を吐き一言、

「ただいま。」

と言った。

詩織の表情が一瞬固まったが、すぐに笑顔になって、

「おかえり。」

と返してくれた。

さて、こちらに戻ってきた挨拶を済ませたところで、俺は詩織に学校へ行こうと言った。

すると、ちよつと待ってねと言って、詩織は携帯を出してどこかへと連絡を取り始めた。

「あつ、会長、詩織です。こちらで今戦闘が終わりました。今回は魔人が出現しました。えっ、いや私1人ではなくて。いえ、生徒会メンバーでもありません。えっと、一般生徒です。これからどうすればいいでしょうか？はい。はい。分かりました。こちらで待機です。えっ、もう1人もですか？はい。分かりました。では待機してます。それでは。」

電話を終えた詩織がこちらに向き直る。

「隼人君、悪いけど1時間目の授業は休んでもらうことになりそう。」

心配しないでちゃんと学校側からの許可も出てるから。」

「ああ、大丈夫だ。やっぱ、魔獣関連の処理って大変なのか？」

「うっん。ただの魔獣ならそんなこともないんだけど、今回は魔人が出てきたからかな。いつもは、正式なガーディアンの人たちに現場を伝えておけばいいだけなんだけどね。その場待機なんて初めてだよ。」

詩織も初めてのことで戸惑っているようだった。

俺自身この後何をしなければならないんだろうかと、逡巡していると、上空から声が聞こえてきた。

「心配せずとも良い。少なくとも2限目の授業には間に合うように計らう。」

女性の声だった。

なつかしく、とても聞き覚えのある。

声の主は空から勢いよく降りて（落ちてと表現した方が正しい気もするが）きた。

しかし、地面が近くなるにつれて重力を無視して、速度は落ちていき、少女はゆつくりと地面に足をつけた。

金色のショートヘアに黒いカチューシャをつけて、フリルのついた黒いドレスを身に纏っている、見た目が西洋の人形のような小さな少女は満面の笑みをこちらに向けた。

「ご苦労だった、詩織。そして隼人、久しぶりだ。それなりの成長がみられて私はうれしかったぞ。」

ディアナ・クロナ。

俺とは、旧知のなかであり戦闘の基礎を俺に叩きこんでくれた人。俺の右頬に傷を付けた人。

懐かしい人物がそこにはいた。

「ディアナ！？お前ディアナか！！」

「ああ、その通りだ。お前の良き主ディアナ様だ。10年振りにな

るな。でかくなってるじゃないか。」

「いつからお前は俺の主になったんだ。しかし、お前も……。」
途中で言葉を発するのを止めた。

こういう時は世辞でも成長したとか、大人になったとか言うべきだろう。

しかし、ディアナの体格は変わっていなさすぎる。

むしろ昔は俺よりも大きかったというイメージによって、こういう言葉が適切に思われる。

背が縮んだんじゃないかと。

そして俺は、自分の気持ちに正直になってこう告げた。

「背が縮んだか？」

眉間からピキッという音が鳴った気がした。

「……久しぶりに会ったものに対する言葉がそれか。私は確かに目に見えるような成長が他人と比べて著しい。身長も小さいし、胸も小さい。いまだに小学生体質を抜けていないことは確かだ。しかし、……決して背は縮んでいなあー……い。」

とすごんで俺の胸倉を掴んできた。

やはりというか、明らかだったろう。

誰でもわかるような地雷だった。

こんなマンガやアニメの世界ではありふれた簡単な地雷に興味本位で突っ込んでいくのは俺の悪い癖だろう。

だが、人間好奇心を抑えるのは難しい。

どうしてもこのことに触れてみたらディアナがどんな反応を示すのか見てみたかったのだ。

「貴様はよからう。あれからスクスクと成長していつているみたいだからな!!!しかし、私はそうではなかったのだよ。この10年間大した成長もなく、伸びた身長はたったの5・1cmだ!!!この気持ちがお前に分かるか。一人だけ時代に取り残されていったようなこの疎外感が!!!」

ドンドン腕に力を入れて俺の体を振っていく。

（てか、小数点第1位まで正確に出てくるとは・・・。）

そんなくだらない事を考えているうちに俺の意識は徐々に朦朧としていき、お花畑が見えてきている気がした。

「そこまです。」

詩織がディアナの手を掴んだ。

ディアナの手から少し力が抜け、俺は意識を取り戻す。

「詩織、何をする。」

「それ以上やると、倒れちゃいますよ。」

「いいではないか!!」

それが当然の報いだとディアナの顔が語っている。

「一応会長にも重要参考人として隼人君を残しているように言われているんです。会長が着いたときに、隼人君が気絶してたら、怒られますよ。」

「ぐぬう・・・仕方なからう。」

納得がいかなそうな顔でディアナが手を離してくれた。

「はあ。はあ・・・助かった。」

詩織もディアナの手を離す。

「ありがとうございます。」

そして、こちらに向き直り、

「それにしても、隼人君も隼人君だよ。女性に久しぶりに会って背が縮んだなんて、失礼にもほどがあるよ。」

「それに関しては俺が悪かった。ディアナすまん。」

「フン。まあ、良からう。今回だけは水に流してやる。」

「これからは思ったことを迂闊に口に出さないように気を付ける。

例えばそれが事実であっても。」

俺は深々と頭を下げた。

「・・・。お前反省してないだろう??。」

小さな少女はまたキレた。

それから、しばらくディアナが怒っていたが詩織がなだめてくれたおかげで、今は少し落ち着いた。

「それにしても、なんでお前がこんな場所にきてるんだ？ウチの学校の生徒って訳でもなさそうだし。」

そう言っていると、ディアナは得意げな顔をして、詩織の方を向いて腕を組む。

「詩織。私は誰だ？」

詩織は呆れた顔をしながら、ため息をつく。

「ディアナ・クロナさんです。というか、その話し方なんですか？」

「ん、あ、そうか、あのお嬢様みたいな喋り方本当の私ではないんだ。今まで猫かぶってたから。」

「はあ？」

詩織は呆氣にとられたような顔をした。

「まあ、お嬢様キャラはもう飽きたしいいだろ。」

手のひらで仰ぐ様な仕草で一蹴される。

詩織は溜息をついた後、

「ある程度分かっていたいましたが、やっぱりキャラだったんですね。」
と言った。

その様子を見る限り、心底呆れているようだった。

しかし、詩織の言葉を聞いたディアナは、逆に驚かされた様子で聞き返した。

「分かっていたとはどう言うことだ。私のお嬢様は完璧だったはずだ。私の聖書バイブルである

アニメ、ゲーム、マンガを使ってしっかりと研究を重ねて作ったキャラだったんだぞ！！」

この10年間の間で、どつぷりとオタク文化にハマってる。

てか、研究して作ったキャラを1年間も飽きずに良く演じたものだ。俺なら必要もないのにキャラを演じることは、3日もできそうにない。

とてもくだらないことに力を注いでいる気もするが、それとは別に
すごさも感じられる。

それに対して詩織は、

「いやもう、雰囲気というか、オーラというか、そういうものが表
面上に出ているものを否定していました。」

ディアナのお嬢様キャラという存在を完全否定する返答をした。

そう言われたディアナは、

「ば、ばかなあああああー!!」

と、崩れ落ちた。

だってお嬢様は大抵あんな感じで喋り方がある程度いじくれば、い
やしかし……。などと、俯いてブツブツ独り言を言い始めた。

ある程度独り言を言っていると、ディアナははっと気づいたように、
顔をあげた。

「てか、そうではなーい!!」

とツツコミ始めた。

「話が完全に脱線しているではないか。」

やっと気づいたか。

会話はお嬢様方面へと脱線していたが、本来はディアナについての
話をしていたはずだ。

まあ、苦悶しているディアナを見るのはとても面白かったが。

「私がディアナ・クロナであることを隼人が知っていることは話の
流れからわかつているだろう!! 私はこの偉大な私のプロフィール
を紹介をしろと言っているのだ。」

詩織はまた溜息をついた。

詩織も苦勞しているのだろう。

1日に何回溜息をついているか今度数えてみよう。

仕方なさそうに、詩織がディアナの偉大なるプロフィールというも
のを語ろうとした。

その時、詩織の後ろから突然現れた一人の男がこう言った。

「詩織ご苦労。そのアホのプロフィールは俺が答えよう。」

男は、眼鏡をかけており、髪の色は黒。

全体的にショートカットなのだが、少しだけ肘の辺りまで伸ばしている部分があった。

その部分も、しっかりと纏めてあり、とても美しく見える。

顔立ちも女性のように見えるのだが、着ている服は俺と同じで男子用のフロンティアの制服だった。

正直、着ている服が違えば女性と間違った可能性もあったと思えるくらいだ。

その男の顔にも見覚えがある。

「お前、静か。」

「ああ。久しぶりだな隼人。」

俺、来島隼人とディアナ・クロナ、そして、この東堂静は昔ちよつとしたトリオを組んでいたことがある。

その中で、静はトリオのブレイン的存在だった。

「今は、フロンティア魔法学校3年生だ。そして、生徒会の生徒会長をやっている。ちなみに、そのアホも3年生で、同じく生徒会の生徒長をやっている。まあ、生徒長と生徒会長って2つを取り上げられても分からんか。フロンティアの生徒会の組織図は後で教えよう。とりあえずだ。ようこそ、フロンティア魔法学校へ。」

転校生の来島隼人。俺たちはお前を歓迎するよ。」

予想外な再会が今日は続くものだ、と俺は思った。

そして、同時にアホアホ言っとなあとか、後ろで叫んでいるディアナがうるさいとも思った。

魔法と世界のあり方（前書き）

今まで、隼人たちの住んでる区域の名称をフロンティア区としてきました。が、学校の略称もフロンティアでとても分かりにくいことになるので、区の名称を思い切ってクロイス区と変更しました。今後こういうことにはならないように考えていきたいと思っています。申し訳ありませんが、これからはクロイス区ということですのでよろしくお願いします。

魔法と世界のあり方

東堂静が合流した後、俺たちは現場検証を行った。

現場検証という大掛かりなことをするのかのように思われるが、内容は簡単なものだった。

1つ目は町の破損個所のチェック。

2つ目は戦った相手の詳細と数。

町の破損個所のチェックは静が簡単に済ましてくれた。

なので、俺の仕事は大黒狼について口頭で告げるだけだった。

後は静の方でまとめて報告してくれるらしく、俺がガーディアンの方々と対面して話すことはないそうだ。

「さて、チェック項目は一通り済んだな。」

チェックした項目を簡単に携帯電話にメモした静は、学校指定の力バンを持った。

「では、色々と隼人に説明しなければいけないこともある。生徒会室の方へ向かうでしょう。」

「ああ。でもよ、今一応授業中だぜ。授業に出なくてもいいのかよ。」

「なんだ、説明されてないのか？一応お前を含めた俺たち4人は1限目の授業を欠席する許可をもらってる。心配することはない。」

「お、おう、それは詩織から聞いてるよ。でも、現場検証終わったんだから、授業受けた方がいいだろう？」

「一般的にはそうだな。ただ、よく考えてみる。現場検証だけなら俺たちだけでも可能だ。お前には、後で呼び出しをして今回の事の顛末を聞く形をとればいいのだからな。だが、俺たちは今から色々とお前に話しておかなければいけないことがある。だから、お前にも残ってもらった。」

静は簡潔に内容を話してくれた。

「まあ、別に学校に着くころには1限目も折り返し地点だ。残り半

分の授業を受けるよりは、私たちの事を聞けたりする方がお前的にもいいんじゃないか？」

と、ディアナも気楽な感じで語りかけてきた。

俺としても、フロンティア生徒会の特殊性は少し気になるところだ。それに、転校生の俺が遅刻していくことで目立ってしまうのも嫌だ。若干だが、授業を中断させるのにも気が引ける。

「分かった。じゃあ、お前たちについて行くとするよ。」

そう言っつて、俺は壁にもたれさせておいたカバンを持ち、静たちについて行くことにした。

学校へと向かう道中、俺はこの町の結界について考えていた。

この町の結界には現場検証の際少しばかり驚かされたのだ。

俺と大黒狼があれだけ激しい戦闘を行ったというのに、壊れていたのは結界が張られていない地面だけだった。

あとは、全て結界によって護られていたのだ。

俺のA4つまり盾4枚を使ったバーストですら結界を破壊することは出来なかったことになる。

ちなみに、それなりの魔法使い1人が張る結界なら、A4を使えば簡単に破壊することが出来る自信がある。

それだけ威力には自信がある技だけに、結界を壊すことができなかったというのは少し悔しい。

だが、逆に取ればそれなりに威力がある攻撃であっても、簡単には建造物を破壊できないということである。

そうなると魔獣関連の事件が頻発するこの地域でも住民はある程度安心してこの町に住める。

なんせ町の建造物1つ1つがシエルターのようなものだ。

魔獣に対する恐怖感もある程度和らげることができるだろう。

そういう意味でこの区の技術力の高さは凄い。

しかし、このレベルの結界が張られている都市は世界でも両手の指で数えられるほどしか存在しない。

そこで疑問が湧いてきた。

「なあ、なんでこのクロイス区とかが使ってる結界技術はもって世界に普及しないんだ？これだけ凄い結界なら他の区にも普及すればいいじゃないか。」

と、生じた疑問の解答を求めて隣を歩く静に尋ねてみる。

「ああ。他の区域からやってきた人たちがそういう疑問を抱くのは当然だ。まあ、なにも理由なしに普及しないはずはないな。」

その疑問が生じるのは当然だというように静は俺の顔を見てくる。

「簡単に言うならば、この結界技術はいまだ未完成であるからだ。」

「未完成？馬鹿言え。この結界の強度は俺が住んでた所の何倍もあるぞ。」

「お前の言う通りだ。強度だけなら既に完成形だと言える。しかし、これだけの強度を作るのにどれだけの魔力が必要だと思う？」

そう言われて考えてみると納得できてる。

「普通の都市じゃあ、この結界の術式を補うだけの魔力を供給できないってことか。」

「その通りだ。」

魔法は一般的に使われているが、ただ魔力を放出するだけで魔法が使えるわけではない。

術式を用いることで初めて魔法を使用できるのだ。

術式とは魔法を形にするためのもの。

そして、術式は魔力がなければただの理論でしかない。

魔力を与えることで初めて魔法として完成するのである。

魔法を家で例えると簡単だ。

つまり、魔法を家とするなら、術式は設計図、魔力は材料である。

大きな家を建てようとすれば、それだけ設計図は複雑になっていき、多くの材料が必要となる。

魔法も同じで、効力の高い魔法を使おうとすれば、術式は複雑になり、多くの魔力を消費するのだ。

しかし、術式を改良することでその消費する魔力を抑えることがで

きるのである。

術式には様々な魔法的記号のようなもので出来ている。

その記号はパズルのように重なりあうことで術式として成立するのである。

この術式には相性が存在し、組み合わせ次第で相乗効果が発生させることもあれば、逆に相殺してしまうこともある。

これをうまく組み上げることで魔法はよりコストを減らして使用することもできるのである。

「クロイス区は、世界でもトップクラスのM・A・Eを保有しているからこのクラスの結界を作ることができる。しかし、クロイス区クラスのM・A・Eは簡単には保有出来ない。だから、術式を改良することが今進められてるんだ。」

「そうか。規模の大きなM・A・Eは、一国で保有できる量は決まっている。だけど、この術式はクロイス区クラスのM・A・Eを使用しなければならぬ。だから、他の区域では使えない。つまり、術式を改良する必要があるってことで、未完成ってことが。」

M・A・Eというのは、魔力を蓄える装置である。

M・A・Eは略称で正式名称はマナ・アブソープ・エクイプメントという。

魔力は世界中に溢れている。

それは空気のように、自然界にごく当たり前に存在しているのである。

しかし、人間がそれを利用するにはそのままの状態では無理なのだ。魔法学では、自然界に存在している魔力のことをマナという。

そして、人間はマナをその体内に蓄えることができるのである。

その人間の体の仕組みを解明して、機械でシステム化したのがM・A・Eなのである。

しかし、このM・A・Eは人間には許容不可能とされるような膨大な量の魔力を蓄えられる分、危険性を有するのである。

規模の大きなエネルギーは存在するだけで、危険なのだ。

だから、一国の領土や人口を考慮した上で規模の大きなM・A・Eを設置できる数を決められている。

魔力量を上げることができないのであれば、そこは技術でカバーするしかないということだ。

「便利な道具を簡単に使用出来ればいいのに、それを制限するものが多く存在するってのは厄介だな。」

世界はなんでこんなに複雑化しているんだろうと思う。

「世の中そんなもんで溢れているよ。」

静のその口振りは悟っている用だった。

「隼人君。」

詩織が、後ろから声をかけてきた。

「見えてきたよ。あれが、フロンティア魔法学校。通称フロンティアだよ。」

そういつて、詩織が指を指す方にはデカイ校舎が見えてきた。

フロンティア魔法学校

生徒会室まで来た俺だが、ここに来るまでフロンティアの施設には驚愕させられた。

フロンティアはこの国の魔法学校の中でもトップクラスの名門校だが、高校程度でここまで施設に違いがあるとは予想もしていなかった。

この生徒会室に来るまでの10分間はこんな感じだった。

まず学校について最初に驚かされたのは校舎への入口である門だ。門の周りに2人警備員が立っていた。

普通の魔法学校にも警備員は配置されているのだが、守衛所から外を眺めてる程度だ。

だが、この程度ならそこまで驚くほどのこともない。驚かされたのはこの次である。

なんと、学校の中に入るのにセキュリティゲートを通り抜けなければいけないのだ。

門は、横幅30mほどもある大きな鋼鉄の門だ。

この鋼鉄の門が親とするなら、セキュリティゲートが子である。

このセキュリティゲートは、生徒たちが混雑しないように10個ほど配置されている。

セキュリティゲートは生徒や学校関係者が持つICカードで開かれるようになってる。

セキュリティゲートの右側に認証機があるのでそこにICカードをタッチすればいいようになっている。

俺のICカードも昨日家の方に届いていた。

だが、図書館での本の貸し出しや身分証明書程度にしか使わないだろうと思っていたので、案内の必需品の項目に書かれていなかったら、持ってきていなかったらう。

認証機にICカードを当てると、盤面が緑色に光ゲートが開いた。

「すげえ門だな。」

ゲートを通り抜けた後、詩織に正直な感想を告げる。

「クロイス区はそんなに頻繁ではないけど、色々物騒なことが起きるからね。学校内に魔獣や不審者が入らないようにっていうのは当然のことだけど、他にも生徒が学校に来たかどうか、校舎を何時に出た行ったかなどを確認するためにも使っているんだって。なにか会った時に生徒が学校にいるかどうか、もし外にいるなら、保護者や近所の方に確認が取れるようにするためにね。もちろん、結界は町の建物と同じ物を使用してるね。監視カメラとかも設置されているし、侵入者用のトラップみたいなものもあるから、防犯に関しては万全な体制だと言えるね。」

「なんかもう、学校の領域を越えてるような気がするな。」

「そう？隼人君の前いた学校はどんな感じだったの？」

「門には警備員がいるだけ、監視カメラの設置とかもないような普通の学校だったぞ。警備員だって、門の前で立っていなかった。守衛所から外を眺めているぐらいだな。」

こんな警備の豪華3点セットみたいな物は皆無だった。

「まあ、警備体制がそれだけ薄いつてことはそれだけその地域は平和だつてことじゃない？それはそれでいいことだと思うよ。」

「まあ、そうだよな。」

確かに、護らないでいい状況であることが一番望ましいだろう。

門をくぐると、次は校舎までのメインストリートの中に中庭、体育館、図書館などの所要施設があった。

「フロンティアは施設も充実してるな。どんなモンがあるんだ？」

「そうだねえ」。大して変わったものはないと思うよ。図書館と食堂、購買、体育館が2つに魔法練習場が1つ、魔法を個人で練習できるように作られてる個人用訓練所と、グラウンド、各クラブごとの施設、それと少し離れたところに学生寮があるくらいかな。」

「確かに、普通だな。それぐらいなら、前の学校にもあったわ。でもなあ〜？」

確かに前の学校にもあったが、規模が違う、とくに魔法練習場や図書館のような魔法に関する施設については一回りと言わず、二回りぐらいの違いを感じる。

「でけえよなあ。」

ここまで違いを見せつけられると、さすが名門校って気持ちになってくる。

メインストリートを5分ほど歩いたところで、ようやく校舎についた。

「でけえな。」

さつきから、でけえしか言っていない気がしてきたが、事実俺が通っていたものとはスケールが違うのだ。

仕方がない。

「先ほどから、でけえしか言っていないぞ。」

思ってたことをディアナにツッコまれてしまった。

もう少し語彙力を鍛えようかと思う。

玄関に入ると靴箱がなかった。

「あれ、靴は履き替えないのか？」

「うん。フロンティアは外履きのまま校舎に入るんだよ。」

「へえ〜。」

靴箱を開くとラブレターなんてことはこの学校ではないのか。

まあ、そんな古いイベント現代で起こることはまずないだろうが。

「俺たちは先生方に報告をしてくる。詩織、悪いが先に生徒会室まで案内していてくれ。」

玄関の中央付近で静が詩織に指示を出した。

「分かりました。」

詩織が了承すると、静とディアナは職員室があるであろう方向へと歩いて行った。

「じゃあ、私たちは6階ね。」

「ああ、分かった。」

玄関の正面にあった階段を上る。

「この校舎ってどういう分け方になってるんだ。」

「えつとね。一階は教職員用の部屋と保健室、それと食堂かな。で、2階から5階までは順番に1年生から4年生まで、そして6階は文科系クラブや各委員会、それと我らが生徒会室があるってかんじになってるの。」

「ほお。全校生徒数はどれくらいなんだ？」

「全校生徒数1012人で、各学年250人程度だね。大体1クラス約25人編成で、1学年10クラスって感じかな。」

「そこらへんは普通の魔法学校と変わらないだな。」

「全ての規模が大きいわけじゃないよ。」

クスッと詩織が笑う。

そうこうしてると、6階に着いた。

「こっち。」

踊り場を左の方へ行く。

一番奥まで行くと目的の場所に着いた。

「ここが生徒会室だよ。中に入るにはICカードを登録しておかないといけないんだけど、ゲストとして入ることもできるから。もし生徒会室に用がある時は、認証機の横にあるインターホンを押せばいいよ。」

「分かった。」

生徒会室にも認証機があるのにも驚きだが、もう耐性がついてきた。説明を終えて詩織はICカードを認証機に当てる。程なく扉が開いた。

「ちよつと待っててね。」

詩織が中に入って行った。

しばらくするとインターホンから声がしてきた。

「ゲスト申請したから、ICカードを使って入れるよ。」

「あいよ。」

先ほどの詩織のように扉を開け中に入る。

そんな感じで施設の数々に驚かされながらここまで来た俺だった。しかし、生徒会室の中に入ってみると、俺の予想に反して普通の部屋だった。

会議用の大きな机が1つと、部屋の隅にパソコンが2台。後は年代ごとに綺麗に並べられた資料が詰まった本棚がある程度だった。

「普通だな。セキュリティがある位だから、もっとすごい部屋なのかと思つたぞ。」

「最初にすごい門を見たから全部桁違いなんじゃないかと思うかもしれないけど、後は普通の学校と大して変わらないと思うよ。ああ、でも食堂はちょっと豪華かな。」

そういいながら、詩織は奥で何か作業をしている。

「隼人君はコーヒーと紅茶どっちがいい？あつ、インスタントだよ。」

「

「じゃあ、コーヒーで。」

「はい。砂糖とミルクは？」

「いらない。」

「了解。」

しばらくすると、詩織はコーヒーを持ってきてくれた。

「どうぞ。」

「ありがとう。」

早速1口いただく。

「うん。まあまあだな。」

「まあ、インスタントだしね。昔の役員が好きだったみたいで結構いいセットはあるんだけど、今は本格的に淹れられる人がいないからとりあえずインスタントだけ用意してるんだ。」

「へー。空^{そら}なんかは喜んで淹れそうだな。あいつコーヒーとか紅茶

とか淹れるの好きだから。」

「そうなんだ。今度ごちそうになってみたいな。」

「いいんじゃないか。今度うちに来いよ。多分淹れてくれるぜ。」

「そだね。空ちゃんにも会ってみたいし、楽しみだな。」

他愛もない会話をしながら過ごしていると扉が開いた。

そして、静とディアナが入ってきた。

「おつ。私も飲み物が欲しいな。詩織、紅茶を頼めるか？」

「分かりました。会長は？」

「ああ。では、コーヒーを頼む。悪いな。」

「いえいえ。」

そういうと、セツトのある方へと詩織は行った。

ディアナと静はそれぞれ自分の位置であるだろう、ホスト席に座る。すぐに、詩織が2人の注文の品を持ってきた。

「早いなあ。」

「生徒長の行動を読んですから。用意はすでにおきましたんで。」

「生意気な。まあ、ありがとう。」

ディアナがカップを受け取る。

「会長もどうぞ。」

「ああ。すまん。」

2人は一口ずつ飲むと、カップを置いた。

そして、静が口を開いた。

「さて、それでは本題に入るとするか。」

行間 1

クロイス区の郊外。

とある山の洞窟の中に豪勢な格好の大男が目を閉じ、腕を組んで石の椅子に座していた。

赤いマントをはおっていて、中世の男爵のような印象を受けるが、その上半身はマント以外何も身につけていない。

体は鍛え抜かれていて、筋肉が岩のような印象を受ける。

肩幅も広いために、余計に大きさを感じられる。

精悍な顔つきをしていて、茶色の髪と顎鬚が貫禄を引き出していた。そんな大男の前に、一人の獣人が突如闇の中から現れた。

「報告です。」

「なんだ。」

閉じていた目を開いて、現れた獣人を見る。

「本日、作戦を執行していたワーウルフ様が途中で妨害にあい、戦死されました。」

「そうか。」

そういうと大男は、再び目を閉じた。

一時の静寂が訪れた後、

「なんだとおおおお！！！！奴が負けたのか？」

と、大男が目大きく見開いて大声を挙げた。

「・・・・・・はあ。」

報告を告げた獣人は相変わらずずれていると思いつながら、半ば諦めたように続けた。

「ターゲットに近づくことは出来たのですが、そこで妨害が入りまして。」

「ふむ。しかし、おかしいなあ。現時点では、ターゲットの近くに力を持っていて動けるものはいないはずだがな。」

顎鬚をいじりながら、大男は思考を巡らせる。

「それが、リストには載っていない者でした。」

「ほう。ということは、今までリストに載らないように、力を隠していたものか、それとも外部から来たものということか。」

「そのようです。フロンティアの制服を着ていたことから、あそこの生徒のようです。現時点で分かっているのは、魔法具は銃と盾でした。」

「そうか、それでその後の足取りは掴んでいるのか。」

「それが・・・。」

そう言つて獣人はうるたえた。

「掴んでいないのか・・・。」

そういつて、淒味のある表情で獣人をにらみつけた。

「そ、それが・・・。使い魔を使つて、上空から見張っていたのですが、途中で危険度SSの 闇の牙 による妨害を受けまして。」

「ふむ。 闇の牙 の妨害ならば仕方があるまいな。」

「この後はいかがしましょうか？」

「うむ。よし、町に魔獣を何体か放りこんでおこう。そうなれば、ターゲットも動かざる得ない。ターゲットが動けばその新鋭も動くかもしれないからな。」

「かしこまりました。」

指示を受けると、獣人はまた、闇の中に姿を消した。

「さてさて、どうなることやら。」

そう言つて大男は再び目を閉じる。

「もしかしたら、このワシが動くことになるやもしれんな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5608s/>

ガーディアン・オブ・スクール

2011年10月17日12時53分発行